

念願かなった姿に 刺さる視線

【中】
ス
ー、た
ン着へ
ピて出
ワを街



サイズはL。友だちの身長は150センチほどなので、着るのは私だとわかるはずだ。

昨年10月下旬、記者の私(26)は友だちの女性と、札幌市中心部の商業施設にあるアパレルショップに入った。

幼い頃から憧れていたのに、「男性」のふりをして生きる中で着ることをあきらめかけていたワンピースを買ったためだ。

店内に並ぶワンピースの中に、まさに望んでいた紺の花柄の一着を見つけた。それを手に試着室へ向かった。

試着室前にいた店員が、私たちをじっと見た。「試着、ですよね」。戸惑っているような表情だった。

一番奥のブースに案内された。斜め向かいのブースに入ろうとしていた人が、「え？」と小さく声を漏らした。私を見て、同伴の人に目配せをした。

気にしていないふりをして、2人の前を通り過ぎた。友だちが「似合いそうだね」と満面の笑みで話しかけてくれて、だいぶ楽になった。

カーテンを閉め、そのワンピースを着た。想像以上にウエストのゴムが縮む。カーテンを開ける。友だちは歓声をあげ、写真を何枚か撮ってくれた。

ワンピースを買えた。帰宅してからは、ワンピースに着替えて、全身鏡に映る自分をしばらく見続けた。ずっとこうなりたかった。



性についての考えを打ち明けた友人と談笑する＝4月2日、札幌市、角野貴之撮影

路上でスマホ向けられ撮影音 「趣味？」友の言葉に痛み

たのだ。どうしてこんな簡単なことに25年もかかったのだろうか。

ついに第一歩

3日後、私はこれを着て外出しようと思った。

札幌で知り合った友だちの女性を食事誘った。服選びを一緒にしてくれた友だちとは別の人だ。この友だちとも、自分の性のことや、性的少数者をめぐる事柄を話し合った仲だった。

待ち合わせをした飲食店へ向かった。午後7時前の札幌市中心部。人通りは多い。徒歩で20分ほどの道すがら、シロジロ見たり、突き刺すような視線を浴びせてきたりしたのは7、8人だった。人の凝視がこれほど目につくものだど、初めて気づいた。

ある人は、信号待ちの間にスマートフォンを向けてきた。撮影音がした。思わず体がこわばった。その人を見ないように気をつけて歩いた。

友だちはすでに店の中にいた。ワンピースを着て行くことは言っていないかった。

相手が心の準備をできるようにした方が親切だとも思ったが、着ていく服装を一言断るだなんておかしな話だ。

友だちは私を見て、言った。「こんばんは。服、可愛いですね。聞いて下さいよ、最近仕事が大変です」。ナチュラルな反応

に少し拍子抜けしたが、それからはワンピースを買った経緯を話したり、互いの近況を交換したりした。

その日の夜、学生時代からの友だちの男性と電話をした。私は、ワンピース姿を外に出たことを話した。すると、こう言われた。

「それは、単純にワンピースを着るのが趣味、という理解でいいんだよね……。そうでしょ？」

私は返答できなかった。「自分を男性と思っていない」「ワンピースだと自分らしくいられるんだよね」「ずっと憧れてたんだ」

どの思いも胸でつかえて、言葉でなく痛みへ変わった。

私は傷つくことを恐れて、ワンピース姿で会う相手やそのことを話す相手は、慎重に選んでいたつもりだった。この日も、この人なら大丈夫だろうと思っ

て、打ち明けた。もっと言えば、この人なら、私の性について感じているだろうと思っていた。

「マイクロアグレッション」という言葉がある。直訳すれば、「小さな攻撃」。話し手に悪意がなくとも、無自覚な偏見や無理解などが聞き手にとっては侮辱や攻撃になり得るといふことを指す。

壁を打ち壊し

3週間後。先の電話をした友だちに、もう一度電話をした。あのとき言葉にできなかった思いを、あら

じめ練習して、伝えた。「この前の電話で話せなかったんだけど、ワンピースを着るのは趣味とは違

んだよね。誰を好きになるか、自分のことをどう思うか、どう自分を表現したいか、人の性のあり方はそれぞれだと思っていて。僕

は、自分の性自認が女性なのか、実はまだ確信が持てない。けど、少なくとも自分を男性とは、ずっと前から思っていない。ワンピ

スを着ると、いつも自分らしくいられて、自分を取り戻したよううれしくなる」

少し沈黙があったのち、友だちは言った。

「説明を聞いて、あなたに変でも、複雑でもないように感じた。社会の枠があるなをやらせさせているだけなのかもな。趣味かって聞いたのは、聞き方が悪かったわ」

社会に存在する「男」と「女」を分ける壁。そうやって私とその友だちが打ち解けるまで、私たちの間にもあった壁。友だちはその壁を打ち壊して理解してく

れたけれど、その友だちが1人で重荷を背負わされているように思えて、私は複雑な気持ちになった。

それに、テレビや新聞で取り上げられる、赤の他人のセクシュアリティを頭で理解すると、10年来の友だちのセクシュアリティ

が自分の想定していたのと違うことを受け入れるのは、重みが違うのかもしれない。(平岡春人)